

ずいそう

キリシタンの津波伝説

松 嶋 憲 昭



長崎に不思議な津波伝説があります。

1. 浦上村のキリシタン

安政の五ヶ国条約締結後、幕府は日本に住む外国人のための教会をつくることを認め、1864年、プチジャン神父らの手により長崎のグラバー園の近くに大浦天主堂がつくられました。翌年の3月、浦上村から来た十数人の一団の中にいた女性がプチジャン神父に近づき、胸に手をあて小さな声で語りました。

「ここにいる私たちは、あなたさまと同じ心の者です。」

キリシタンの発見です。禁教令発布から250年の時を経てなお、民衆の心の中に息づいていたのです。

弾圧を恐れ、証拠になるものを極力残さないようにしていたため、聖書のようなものはなかったようです。250年の年月は長く、昔の宣教師から聞いた話は、親から子へ、子から孫へと語り継がれるうちに、想像できないほど変わっていました。

プチジャン神父は、浦上村の信者たちから不思議な話を聞きました。

天地始之事

段々人^{だんだん}多くなるにしたがい、みな盗み^{かたぶ}ならい、欲をはなれず、悪に傾く。次第に悪事^{たいてう}つるゆへ、でうす、これをあわれみたまひ、はつは丸じといふ帝王^{ごつう}に、御告げぞ有けり。此寺の、獅子駒^{あり}の目赤色になるときは、津浪^{この}にて、世はめつぼうとの御告げをかふむり、帝王は日ごとに寺あまいる。其ひまに大きな高山に、くり船^{ししこま}を致すなり。しかるに帝王の、獅子駒をおがま^{つなみ}手習い子ども集まり見て、いかがにして獅子駒は拝る哉^やといふは、脇^{わき}かた子供聞いて、獅子の目赤色になるときは、此世界は波にて滅亡する。脇の子供聞いて、笑いて言ふやうは、さてもおかしき事、塗りたらすぐに赤くなるが、万里もある島の滅亡は、思いもよらぬと、塗りけり。はつは丸じ、いつものとうり、参詣^{さんけい}し、獅子の目赤きを見て、はっとおどろき、かねて用意のくり船に、六人子供をのせ、兄壺人は、足弱くゆへ、残念ながら残し置く。かかる所にあいだもなく、大なみ天地をおどろかし、片時^{へんじ}の間にただ一面の大うみにぞなりけり。 注) はつは丸じ：papa martyr (教皇殉教者)

ノアの洪水が、津波の話に変わっています。

キリシタンたちの多くは、その後、再び洗礼をうけてカトリックに変わったのですが、平戸や五島などでは、ごく最近まで（あるいは現在も）昔のままの信仰を守っている人たちがいました。その人たちは、新しくできたカトリックの教会にも行かず、地区からも孤立していたそうです。教会の晴れやかなマリア像よりも、棚の奥に隠された乳飲み子を抱く農婦の像に、救いの姿を見ていたのでしょう。この人たちにとっては、雨で大洪水が起きる話よりも、津波が襲ってくる話のほうが、真実味があったのかもしれません。

キリシタン発見のニュースが東洋の奇跡として西欧に伝えられた後、浦上村の信者たちはキリシタンであることを明らかにし、寺の檀家から離脱する行動を起こしました。1867年に長崎奉行所の捕方が浦上村を急襲し、中心人物68名を逮捕したものの、このときは外国領事団からの強い抗議を受けて、処分保留のまま全員を釈放しています。

維新後、神道国教化政策を進めていた明治政府は、キリシタンに対して厳しい姿勢をとり、浦上村民3,000余人を総流罪することにし、1868年6月に中心人物114名を萩・津和野・福山に、続いて翌1869年12月に残りの信者を高知などに移送しました。流刑地では、激しい拷問が行われました。

流刑地での生活は、明治政府が外国からの抗議に屈服し処分を撤回する1873年3月まで続きました。釈放された信者たちは、再び浦上の地に帰りましたが、この事件により600名近くが亡くなったと言われています。

2. 高麗島の伝説

長崎県の五島にも津波伝説があります。この五島の伝説とキリシタンの伝説はよく似ています。

民俗学者の柳田國男が、1931年に旅先で不思議な話を聞きました。『島の人生』の「高麗島の伝説」に、その話が載っています。

現在はすでに何でもないただの水面であって、おそ

らくは最も精密なる海図だけに、ほのかにその痕跡を留めているのみであろうが、沖松浦の漁民等は、今でもその場処を高麗瀬、もしくは、高麗曾根と称してよく記憶している。ちょうど下五島の三井楽の浜から、真北に十里余りも出た沖ということで、そこでもこの高麗瀬の昔語りを、聴いておらぬ船子はないという話である。

この高麗曾根について、長崎大学水産学部研究報告に「五島列島小値賀島の南西にある暗礁で、頂部は巨大な白い岩盤で、船上から見え、その最浅部は約4m、所々に付着している黒褐色の海藻が波にゆらゆらとなびいている」と紹介されていました。



昔高麗島には靈験のいたってあらたかな、一体の石の地蔵菩薩がおわしました。信心深い人々の夢枕に立って、わが顔が赤くなったら大難の前兆と心得て、早速に遁れて命を全うせよという御告げがあった。邪慳の輩のみはかえってこれを嘲り、戯れに絵具をもって地蔵の御顔を塗って、驚き慌てて遁げて行く者の魯かさを見て笑いの種にしようとしたのであったが、前兆はなおまさしく、島は一朝に海の底に落ち沈んで、残った者の限りはことごとく死んでしまったというのである。

石像の顔や目が赤くなって島が沈む話は、伊勢湾の鯛島（絶えの島）、別府湾の瓜生島、徳島の亀島など全国各地にあります。もともとは中国の揚子江の河口に近い、湖が多い地方の話だったようで、『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』にも中国の都市が海に沈む話として紹介されており、よく知られていた話のようです。また、韓国にも広浦伝説、長淵湖伝説など同じような話があり、仏教文化とともに日本に伝わったという説もあります。

大地震で何度も津波の被害を受けた太平洋岸であれば、このような説話をもとに津波伝説ができるのはよくわかるのですが、大地震の記録がない長崎に津波伝説があるのは不思議です。

3. 海に沈む島

2万年前の水期の最寒冷期には、北欧や北米に厚さ数千mの巨大な氷床ができ、大量の水が陸地に閉じ込められて、海面が現在よりも100m以上も下がっていました。日本と朝鮮半島がほぼ陸続きになり、私たちの祖先がここを渡って大陸から移動してきたと考えられています。

その後、氷床が融けて海面が再び上昇し、朝鮮半島から九州にかけての広大な陸地が徐々に水底に沈んでいきました。氷床の融解は7千年前には終わったのですが、増えた海水の重さで海洋底がゆっくりと沈降し、海洋底のマントルが陸側に移動して陸域が隆起するハイドロアイソスタシー（海水荷重地殻均衡）によって、その後も海面の変化が続きました。7千年前ころ、日本の多くの地域で、海面が現在よりも2～3m高く、海岸線が内陸部に侵入する縄文海進と呼ばれる現象が見られました。その後、地殻が上昇することで相対的に海面が下がり、海岸線が後退して関東平野や濃尾平野が広がる現在の姿になりました。ところが長崎県西部では、陸域の上昇よりも、東シナ海の海洋底が沈降する動きのほうが大きく、海面の上昇が続きました。五島や平戸の海岸の浅瀬に、縄文前期から中期（6～4千年前）の水中遺跡も見つかっています。

五島列島の福江島の地層調査によると、7千年前は現在より11m海面が低くなっていました。高麗曾根は、暗礁ではなく、立派な島でした。縄文時代から弥生時代に変わる5千年前に海面が現在より2m低かったという調査結果がありますので、このころに高麗島が海に沈んだのではないのでしょうか。

秀吉が15万余の大軍を朝鮮に派兵した文禄の役が1592年、再び14万余の兵を送った慶長の役が1597年。この二つの役の間の1596年に発生した慶長豊後地震の津波で、多くのキリシタンが住んでいた豊後の府内（現在の大分市）が壊滅的な被害を受けています。肥前の名護屋城の付近の港に、全国各地から大名の水軍と兵や物資を輸送するための海運関係者や漁民が集結していました。この中に慶長豊後地震を経験したキリシタンたちがいたのは間違いありません。この人たちが長崎のキリシタンに津波の話を広めた可能性があります。

はるか昔の島が沈んで居住地を追われた恐怖体験が、幾世代にもわたって継承され、それと中国の説話が結びついて高麗島の伝説になり、さらに慶長豊後地震の津波の話が結びつき、キリシタンの津波伝説になったのではないかと思います。